

その十二 大阪の家

夕方、名古屋付近で渋滞に巻き込まれたが思ったより早く早く大阪に到着した。疲れているが気はしっかりしている。と言うより守の言葉が道中ずーっと頭の中で響いていたから興奮していただけ。

そう、社員寮を出る決意が始まる一連の決心は固い。寮は黒馬からの終着駅——そして一連の決意の始発駅。

高校一年の時から住み続けていたモリ・P R・コーポレーションの独身寮に今、戻ってきた。軽量鉄骨造りの二階建て。部屋数は十。俺の部屋は一階で、六畳一間に押入れとミニキッチン。そんな自分の部屋の前に立つ。鍵を差し込もうとすると紙が貼ってあった。

「守部長に電話してください。自宅、または病院………」

管理人のオバチャンが貼ったのだろう——紙を剥がして部屋に入る。冷暖房完備で、家賃五千円（水道光熱費は自己負担）は安い。汗が噴き出す。大阪は夜でも暑い。クーラーのスイッチを入れる。静かに作業をしなければならない。

まず布団を車に積む。そして数少ない衣服を載せていく。次に割れたり潰れやすいものを布団や衣服に挟んだり置いたりする。車は瞬く間に満杯になった。まだ半分以上残っている。

夜の大阪——大阪に限らず大都市では同じだろう、走る車はタクシーばかり。それに意外と信号が明るい。路上が赤く染まる。ヘッドライトを消して青を待つ。

ふと助手席に積み込んだ本を見る。何か挟まれていた。チケットが二枚。「納涼怪談話・桂米朝独演会」——随分前に守がくれたものだった。このようなチケットもモリ・PRがデザインするので手に入ることがある。

後ろからクラクションが鳴る。いつの間にか地面が青に変わっていた。アクセルを踏む。早く引越しを済ませたいので高速道路に入る。料金所のオッサンが「おおきに」と通行券の半券をくれる。

「東山さんと一緒に」と貰ったのが、この落語のチケットだった。ここにチケットがあるという事はデートでできなかったという事。

美英子とうまくいったら、夏子と結婚してもショックに耐えられると計算したのか。それは誤算。なぜなら気持ちというものは計算できない。それに美英子はソファアではなくムシロと言う印象が強い。いずれにしても俺は守モリの小説の悲劇の主人公に仕立て上げられていた。

いつからか、守の親切に違和感を抱き続けたが終わった。昨日、友情は完全に消滅した。いや元から存在してなかった。

*

高速道路を降りる。暗くて道がわかりにくい。そりゃ、そうだ——もう何年も家に帰ってな

い。脇道に入る目印の電話ボックスを見つめる。電話と美英子が結びついた。

——無事に帰ったかなあ

財布に十円玉があれば電話しようと思つて決める。

——あつた！

複雑な仕方なさを抱きながら車を降りて蒸し風呂のような電話ボックスに入る。ふと腕時計を見る。

——十時か。やめとこ。それより引越しや

意味のない溜息をついて再び狭い道を走る。やがてポロポロの平屋の家にとどり着く。しかし、懐かしい光はない。それに玄関の把手トッテが回らない。

——もう寝たんか

「オヤジ、俺や、開けてくれ！」

何度か叩く。まったく反応がない。突然、後ろで「ギギー」という扉が開く音がする。向かいのオバさん……何年も会ってないうちにお婆さんになっていた。

「まあ！ マモルちゃんじゃないの。大きくなつたね」

「今晚は。ご無沙汰しています。オヤジ、出かけてるんですかねー？」

「それがね、心配で心配で。三ヶ月程前からずーっとお留守みたいで」

「エッ！？」

残りの荷物もある。どうしたものか。やむを得ずオバさん立ち会いのもと、潰れてもいいから力を込めて把手を回す。すると難なくドアが開く。鍵はかかっていたいなかった。錆び付いていただけだった。

「まあ！ 用心の悪い事！」

オバさんは腰を抜かすが、俺は「助かった」と思った。

「明日から、ここに住みますので、よろしくお願いします」

深々と頭を下げるとオバさんが喜ぶ。

「よかった、よかった。これで安心して眠れる」

*

次の日の夜、用を終えた車を守の手荷物と共に会社敷地の端にキーを差したまま放置した。そして逃げるように会社を辞めて二ヶ月近くになった。連絡しなかったし連絡もなかった。社長死亡を知ったのは随分あとで、葬式だけにはと思っていたが義理を欠くこととなった。

残暑は息切れし、秋の風が木の葉に化粧を促すころ前期試験が始まる。それまで講義はもちらんのこと、夜間課程への編入や住所変更手続きもあって毎日のように大学へ行つたが、守を見かけた事はなかった。

今日は俺にとって昼間課程最後の試験日。守は最短で単位を取っていたから残す一科目の試験が俺と同じでまさに始まるうとしていた。

講義室に入るが守を捜すつもりはない。すぐ背中から聞き覚えのある声がする。

「二世^{フタゴ}。話を聞いてからでも遅くなかったんでは」

守が分厚い封筒を差し出しながら続ける。

「七月分の給料と退職金。上町さんらが大阪に帰る時に立て替えて貰った切符代。それに私物」別に謝る事もないけれど「すまん」と答えて受け取らなかつた。

「試験、終わったら話を聞いてくれないか。駅まで送るから、その間だけでも。よかつたら大阪まで送る」

守は車で来ていた。

「……とにかく、試験済ませよーか。取りあえず預かつてくれ」とだけ返事する。

これから歩む道が暗いとは言え、決めた事だから気迷いはない。

試験を済ませると俺の口は軽くなつた。車の中では話を聞くどころか先に質問していた。慰めにならないし会話の内容によっては立ち直れないほどのショックを受けると分かっていた。でも夏子の話になると守は答えようとしなかつた。守独特の配慮と言えばそれまでだが。

すぐ六甲駅に到着した。今度は言い訳を聞くことになる。

「熊本で打ち明けようと思つたけど、西海^{ニシウミ}さんと別れたと聞いて切り出せなかつた」

いよいよかと身構えるが、やはり夏子の「な」の字も出ない。

「西海さんか、東山さんとも……とにかく、二世が先に結婚したら、機を見計らつて打ち明

けようと思つてたんやけど……」

——知秋とでも、美英子とでも……先に結婚！

急に怒りが込み上げる。もう何もかもが終わり何もかもが暗い未来へ着実に進んでいる。それでも知りたい事があるが、それが何になる！

——もういい！

「親父さえ倒れなければ……もう少し時間が……」

「社長の葬儀に参列できなかつたこと、申し訳なかつた……じゃあ」

お互い言い訳に区切りが付くと俺は無条件放棄してドアを開ける。

「東山さんとはうまくいつてほしい」

「関係ない」

地に足をつけた。先ほどの封筒を押し付けながら守は執拗に続ける。

「二世の住所を知りたがっていた。黒馬から帰ってきた翌日……会社を辞めた日、電話があつた」

——そうか

少しだけ気が和らいだ。

「寮の電話が繋がらなかつたらしい。さつき事務室で調べたら住所が実家になつてた。教えてもいいか？」

「もう、ほつといてくれ」

ケリをつけるためドアを強く閉める。そのまま改札口に向かう。

——何故、素直にと言うか単刀直入に早く打ち明けてくれなかった！

でも打ち明けてくれたとしても結果は変わらないし受けるショックは原爆並みだろう。すると計算しすぎたやり方を除けば、守は配慮が行き届いた優しい対応をした事になる。いずれにしても俺は何とか持ちこたえている。

そう思っても、様々な憶測が浮かぶ。アイツの過ちは夏子を好きになったと言う事だけなのか。いや、それより俺を傷つけまいとする身勝手なお世話が問題だったのか。しかし、原因が分かったところでどうにもならない。

守が言うように美英子が見直したとしても……傷ついた俺の心をどうする事もできない。とにかく鼻に付く守のやり方は許せない。作爲的に何とかしようとするほど気持ちいは遠のく。こんな当たり前の事、何故わからないのか。やりきれない気持ちだけが残る。

ホームのベンチで守から受け取った封筒を開けて驚く。会社にほとんど私物を残していないと思っていたが、そうではなく百万円の束がふたつ、手書きの明細とともに入っていた。

「自己都合なので退職金はあまり出せないが、烏来ウライの件で多額の報酬が入った。他にも立て替えてもらっている。受け取りの証アカンシはいらない」

——手切れ金か

勘弁してくれと言う事。つまり守にしても夏子にしても既に俺は邪魔な存在になった。

*

「……の夕方五時に六甲駅の三宮行ホームの中央付近でお待ちします。その日がだめなら次の日も、その次の日もお待ちします。美英子」

一瞬、誰からの手紙かと思った。かなり間が開いていた。関心が薄れて俺から電話しなかった。とは言え、受け取った手紙の中で一番短かったが「会いたい」と言う内容に気持ちが高ぶった。少し早いに六甲駅に降りた。講義は六時からなのでいつもなら改札口に近い最後尾の車両に乗って五時一五分ごろに降りる。

今、四時五十五分。真ん中当たりの車両から降りる。そこにベンチがある。美英子はこの電車には乗っていなかった。それにしても「五時」を意識してホームに降りたのは……やっぱ好きなんだ。でも美英子の本心は分からない。

手紙が来たのは十日前で地方公務員の中途採用試験日の直前だった。美英子は守キリから俺の住所のみならず夜間課程への衣替えなどの情報を手に入れたのは明らかだった。それは待ち合わせの指定日が後期の講義初日だったから。

姑息な事を考えたわけではないが、俺は跨線橋を渡って大阪梅田行ホームの同じ中央付近のベンチに座って向かいの神戸三宮行ホームのベンチを見つめる。五時ジャスト。しかし、美英子の姿はない。

六甲駅は少し変わった駅で構内は複雑で真ん中の複線部は特急通過専用線になっている。その外側（海側）に三宮行の、反対側（山側）に梅田行の各停の待避線がある。だから特急が気兼ねなく各停を追い越せる。

三宮行の各停が左方向から向かいのホームに入線した。ドアが開いて乗客が降りる光景が電車の窓越しに見える。各停はホーム側のドアを開けたまま特急の通過を待つ。だからこの駅で特急に乗り換える事はできない。

「この電車は特急通過のため三分間停車します。発車までしばらくお待ち下さい」
やがて特急が中央の線路を走り抜ける。あつという間だ。しばらくしてアナウンスが聞こえてくる。

「大変長らくお待たせしました。三宮行各駅停車が発車します」
すると俺がいる梅田行ホームの構内アナウンスが流れる。

「間もなく、梅田行の各駅停車が六両で到着します。ホーム白線の後ろでお待ち下さい」

向かい側の電車のドアが閉まる音がする。そして本線に向かつてゆっくりと走り出す。ホームの人影をチェックするが、右方向から入線して来た梅田行の各駅停車が視界を遮る。

ブレーキ音がする。三分間の停車時間を利用して三宮行ホームを窺^{ウカガ}うために、乗客が降りるのを待つてから乗り込んで向かいのホームを見つめる。

電車が発車したばかりなので人影はまばらだ。美英子をチェックしようとしたとき俺がいる

各停を追い抜かず特急が通過する。通過後、目を皿のようにして向かいのホームを見るが美英子は居なかった。

発車ベルが鳴ったので慌ててホームに戻る。最後尾の車両が過ぎ去るのを待つ。すると向かい側に次の三宮行各停が入線する。これでは向かい側の様子を確認できない。

跨線橋に向かう。跨線橋と言っても雨風をしのげる立派なもので、大きな窓から両ホームを見渡せるがホーム中央までの距離は遠い。乗客は海側の改札口や跨線橋を渡って山側の改札口に向かう。待ち合わせする人を除いて、ホームに留まる人はほとんどいない。中央付近のベンチに座っているのはおっぱ頭の女の子。美英子ではなかった。

次の電車まで待つか、思案する。ホームの時計を見る。もう一時間にもなる。真に受けた俺がアホなだけ。改札口に早足で向かう。結局後期の講義初日から遅刻した。

何もかもが終わったような気持ちで大学までの坂道をとぼとぼと登っていく。守^{キリ}だけでなく、美英子も去った。それにオヤジも。誰もかも消えた。